

八月廿日

杉登

任在判

坪坂伯耆入

宇丹入

川左次

岸新右

御宿所

(兩御寺は越中勝興寺及び瑞泉寺なるべし。)

【坪坂文書】

一五三三

端書不申候。

急度令啓達候。仍輝虎一昨日十八日(新川郡)新庄表着陣、則山

之根居陣候。當表之儀火急之條、先能美郡衆下口被馳向

候様、可然存候。當表落居仕候者、越前之覺旁候條、以御

才覺可被仰付候。委曲猶從杉浦殿被仰越候之條、不

能懇筆候。恐々謹言。

旗本中

八月廿日

石川郡 在判

坪坂伯耆入道殿

川那部左衛門次郎殿

岸田新右衛門殿

御宿所

八月廿九日。越中瑞泉寺顯秀、金澤御坊の坪坂伯耆に、その國の戰況を報す。

【坪坂文書】

一五三三

猶々京都之御着慥被示下候。難有奉存候。將又新五郎

殿御所勞は御本復之儀候哉、無御心許存候。尤以書狀

可申上候へ共、此由傳達頼入候。

態預示候。本望候。

一、大樣十九日立之御着御無事、殊更御門跡様御健氣御

座候儀難有存候。

一、去十八日上法父子・刑法・筑法・按法、中嶋迄三好供候

て御出馬、所々放火候て納馬之儀、彌御強之段珍重候。

一、京表之儀、上意御用心之由。併當方彌御堅固之故候

哉。重而之御一着候者可示給候。

一、此口之儀、先以無異儀候。昨日者敵相働、今夜者頻

及鐵炮戰候事候キ。相替事候へ、可令申候。

一、江北之儀、如何聞得申候哉。義景一段手強之由申候

間可然候。一着候者、後便可承候。心緒追而可申述候。

恐々謹言。

瑞泉寺

八月晦日

顯秀 在判

坪坂伯耆入道殿

御返報

(本文書中に大樣とあるもの、何人なりやは明らかならず。永祿十一年三月十六日の條参照。)

九月四日。溫井景隆、金澤御坊の坪坂伯耆に、

上杉謙信の越中より納馬せんとすとの風聞を報

す。

【坪坂文書】

一五三四

先日者乍御報、御懇書本望至候。仍南方之儀、様躰具示

八月廿日

坪坂伯耆入道殿

川那部左衛門次郎殿

岸田新右衛門殿

御宿所

八月廿九日。越中瑞泉寺顯秀、金澤御坊の坪坂伯耆に、その國の戰況を報す。

【坪坂文書】

一五三三

猶々京都之御着慥被示下候。難有奉存候。將又新五郎

殿御所勞は御本復之儀候哉、無御心許存候。尤以書狀

可申上候へ共、此由傳達頼入候。

態預示候。本望候。

一、大樣十九日立之御着御無事、殊更御門跡様御健氣御

座候儀難有存候。

一、去十八日上法父子・刑法・筑法・按法、中嶋迄三好供候

て御出馬、所々放火候て納馬之儀、彌御強之段珍重候。

一、京表之儀、上意御用心之由。併當方彌御堅固之故候

預、畏入存候。其後相替無御左右候哉、承度候。隨而越中

表之儀、富山一段堅固依被相踏、越後衆失手之由候。信

玄信州へ出馬之間、輝虎人數可被入かとの執沙汰候。爰

許相替儀候者、從是可申入候。恐々謹言。

九月四日

景隆 在判

坪坂伯耆入道殿

參御宿所

九月五日。遊佐盛光、上杉謙信の臣河田長親に、その馬を贈りたるを謝す。

【歴代古案】

一五三五

其御表于今御居陣之由、彌被達御本意之由尤候。珍重

候。仍先度者、御馬一疋鹿毛被送下候。過分至極、致秘藏

繫置候。忝存候。就中雖無見立候、具足一兩腹當惣糸糸

進上候。可然之様可預御披露候。恐々謹言。

九月五日

遊佐四郎右衛門尉 盛光